



全道展交流紙

2020.3

No.59

75 周年記念全道展を迎えて

—— 育て、育てられた「個」の集団 ——

全道美術協会事務局長 田崎 謙一

年頭にあたり日頃より全道美術協会の諸活動に対し、関係者の皆様のご支援、ご協力に心よりお礼を申し上げます。当協会（以下全道展）は今年、創立 75 周年を迎えます。昨年は「令和」への改元という時代の節目となった年であり、これまで全道展の長い歴史と歩みを共にしてきたことを思うと、感慨無量です。

戦後の混乱期、まさに起伏に富んだ時代背景の中で全道展は誕生しました。その経緯については 1975 年、30 周年記念全道展開催に合わせ、当時 50 代であった本田明二会員（彫刻）が詳細に調べ記録された文章が残されています。創立に奔走する多くの方々の肉声や熱気までが伝わって来るような貴重な資料であり、「全道展のバイブル」と言っても過言ではありません。（全道展ホームページ「全道展の歴史」にて閲覧できます）一方では 75 年も前の昔であり、今という時代とは違う、と捉える人もいるかもしれません。確かに戦後 75 年余りが経過し若かった創立会員と創立当初の会員のほとんどは、鬼籍に入られました。後に続く私たちは少子高齢化など深刻な社会

問題に直面しています。昨年は苦渋の選択で、60 年間続いた学生美術全道展に幕を下ろすことになりました。今年から学生展に出品されていた出品者を、23 歳以下（学生を含む）世代の出品者として一般出品者と同じ土俵で審査することになります。新たに 23 歳以下を対象にした賞も設けます。（出品案内で詳細ご確認ください）ハードルは上がりますが、是非挑戦していただきたいと思います。

価値観の多様化を含め混沌とした現代は、どこか閉塞感漂う不確かな時代であると言われるます。美術界も例外ではなく、公募展も大変難しい局面を迎えていると実感します。年齢に関係なくそれまでの仕事に安住せず、時代への新たな視線を絶えず見据えて自分を問い続ける事を胸に秘め、まずは制作に傾注し質の高い作品を創る事が重要であると考えます。私たち一人一人は、かつての創立会員や諸先輩会員たちが築き上げて来た全道展のスピリッツのうえに、プラスアルファを加えた存在でありたいと思いますし、それが全道展を母体として「個」を育んで来た、75 周年目の証しになると思います。

75 周年記念全道展 概要

部 門 絵画、版画、彫刻、工芸
会 期 2020 年 6 月 10 日(内)～6 月 21 日(日)※ 15 日(月)休館
10:00～18:00（最終日は 16:30 まで）
会 場 札幌市民ギャラリー（札幌市中央区南 2 東 6）
入場料金 当日券 800 円 前売券 600 円 23 歳以下・障がい者
無料
出 品 料 3 点まで 8,000 円、1 点追加ごとに 1,000 円
※ 23 歳以下の出品料 2,000 円
(1997 年 4 月 2 日以降生まれが対象)
※「第 61 回学生美術全道展」の入賞者は無料
搬 入 6 月 2 日(火)、3 日(水) 10:00～17:00

賞 75 周年記念賞、全道美術協会賞、北海道新聞社賞、
八木賞、佳作賞、奨励賞
※ 23 歳以下の出品者を対象に最優秀作品に「北海道
美術館協力会賞」及び「新人賞」を新設
イベント ※2020 年 6 月 13 日(土) 13:00～14:30（予定）
各部門の会員 4 名によるギャラリートークを開催
15:00 から出品者への作品講評会を行う。
授 賞 式 6 月 13 日(土) 18:00～
会 場 ANA クラウンプラザホテル札幌
表彰式・懇親会へのご参加を歓迎。
※詳細は出品目録などの資料でご確認願います。

第 61 回学生美術全道展の審査を終えて

会期 2019 年 10 月 5 日(土)～10 月 8 日(火)

1 つの時代の終焉 将来を担う若いエネルギーに期待

審査委員長 川本ヤスヒロ

本展と同じく絵画、版画、彫刻、工芸の 4 部門への応募数 121 点、そのうち入賞、入選の 107 点が展示された会場。1 階ロビーに過去のポスターを、別の一室には道新に掲載された貴重な記事や目録を展示し最後を飾るに相応しい会場であった。観賞していた人からは「随分長く続いたのに残念」との声も聞かれたなか、学生美術全道展は 60 年の歴史に終止符を打った。

昭和、平成と続き 60 年間の長い歴史を持つ学生美術全道展が令和に元号が変わった昨年、第 61 回展で終了した。終息の結論に至った最大の原因の 1 つに応募点数の減少がある。私が高校 1 年の時に出品した第 8 回展での搬入点数は 1232 点であった。2 日間の審査が行われ、その後、第 10 回展 800 点、第 20 回展 493 点、30 回展 400 点、40 回展 457 点、50 回展 311 点と減少し、昨年 60 回展は 146 点にまで落ち 61 回展の搬入点数は実に 10 分の 1 の 121 点まで激減した。

学生美術全道展は大学生、高校生の若い感覚や発想の作品が何と言っても魅力である。出品作品の大きさにも制限はなく、自分の表現したい大きさのキャンバスや立体で自由に出品でき、完成度を越えた熱気を感じたものだった。

最後の審査を務めた感想だが、最高賞の全道美術協会賞ならびに北海道美術館協力会賞受賞の工藤ももさん(札幌大谷高校 3 年)の作品『これから』は、192 cm×192 cm のベニヤ板に若い女性の人体を大きく配置した構図である。脱ぎ捨てた学生服や背景の標識との関係は、これからの自分の未来を暗示させ、淡い暖色系の色彩と背景の微妙な寒色のコントラストが一層空間に密度を深めており美しい。最高賞にふさわしい佳作であると思った。

ここで過去の最高賞の受賞校を振り返ってみると、北海高校 11 回、札幌大谷高校 7 回、おといねっふ美術工芸高校、教育大岩見沢各 4 回、札幌西高校、教育大札幌各 3 回、札幌大谷短大、小樽桜陽、東海第四、岩内、釧路北陽高校各 2 回である。他に教育大函館、教育大釧路、文化女子室蘭短大、北海道デザイナー学院、北星学園女

子高校、札幌平岸高校、札幌啓成高校、札幌厚別高校、小樽潮陵高校、帯広柏葉高校、旭川藤女子高校などの活躍があった。

会期中の 6 日(日)は表彰式に続き、ここ数年実施しているミニ講座が開かれ、講師の宮地明人会員(絵画)が自作をスクリーンに映し、制作過程や制作のポイントなどをわかりやすく解説した。約 50 名の聴衆は宮地さんの作品を鑑賞して、その美しい作風に圧倒され大いに刺激を受けたようだった。

学生美術全道展の終了後も、発表の場として高文連、有島青少年絵画展、道展主催の U 21 がある。しかし全道展としては、75 周年記念全道展から 23 歳以下の出品料を現行の 4000 円を学生美術全道展の出品料と同額の 2000 円にすることで、学生たちもより全道展に出品しやすいようにした。そして、1 番すぐれた作品には今まで通り北海道美術館協力会賞の副賞が授与される。最近の学生美術全道展の受賞作品はレベルが向上し、本展に出品しても十分通用するほどの実力のある作も珍しくない。だから本展の審査では学生も一般も関係なく作品本位で審査すべきであると私は思う。熱意のある若い人たちに、是非全道展に挑戦してもらいたいと強く願っているのは私一人だけではない。

学生美術全道展に出品した経験を持ち、今も各地で美術活動を行っている人々や全道展関係者、開催を支えてくださった多くの方々に、謝意を表すとともにこれまで積み重ねられた長い年月は、北海道の文化向上の役割りを大いに果たしたと言えると思っている。

第 27 回表彰式で
枋内忠男元会員ら。
高揚期が懐かしい。



最後の表彰式で挨拶をする川本ヤスヒロ会員



看板を撮影する人も



挨拶する田崎事務局長



学生展のポスターをロビーに展示



講評に耳を傾ける出品者



「絵画制作について」をテーマに
宮地会員によるミニ講座



第1室で行なわれた
受賞式



最高賞受賞の工藤もさん（札幌大谷
高3年）の「これから」——思い出の作
品になるだろう



あの日 あの時 My History



—— 回想 ——

「第1回学生美術全道展」と 美術への開眼

〔絵画〕佐藤 光雄＝伊達市

60年もの前の記憶の糸を手繰り寄せている。時間の経過は、まるでセピア色したあちこち剥落した写真だ。

昭和18年生まれの私は、中学を卒業してすぐ室蘭にあるF製鉄会社の企業内学校に入り、2年間社員としての勉強と実習に明け暮れた。入学してまもなく社内の柔道場で大人の部員と「乱取り」をやっている最中に腰に大きなダメージを負ってしまった。その為1年近く通院を余儀なくされ、気持ちも減入り卑屈になっていた。

そんな学校生活にあつての楽しみの一つは、昼休みに構内にある図書館に通い、美術全集を借りて鑑賞することだった。「菱



定時制高校の教室風景。中学校の間借り校舎で暗くて寒かった。（手前が私）

田春草」、「横山大観」といった日本画から次第に洋画にも興味を持ち、「満谷国四郎」の二人の裸婦が登場する『緋毛氈』^{もうせん}には、中学校の美術の副読本にあった「アングル」の『泉』と同じくらい目がくらんだ。

ある時、校内で「第1回学生美術全道展作品募集」のポスターに触発され応募を試みた。指導者などいるはずもなく、ただ我流で日本画調の絵を、変形50号大のベニア板に簡単に貼り付けた模造紙に描いた。意に反して「選外」の連絡があり札幌まで引き取りに行ったが、それは無残に破れていた自分の絵との対面であった。搬入の際、薄手の模造紙では恐らく混載での輸送の途中に破損したに違いない。責任のぶつけどころがなく重い足取りで惨めな思いの帰途だった。あれ以来ずっと「学生美術全道展」には完全に封印してしまっていた。

私の「灰色の青春」が長いトンネルを抜けてやっと日の目を見たのは、定時制高校を卒業して3年目、6年間勤めていた会社を辞めて山形大学教育学部美術科に入学してからで、本格的に「美術」とは何かを学び、「油彩画」の技法に手を染め始めた、正に「美術開眼」に向かった時だった。既に23歳になっていた。

第23回全道展十勝地区展報告

—嬉しい朝ドラ効果、
岡沼淳一会員の遺作も展示—

十勝地区代表 齊藤 隆博

「令和」時代の幕開けとなる第23回全道展十勝地区展は令和元年8月1日～6日まで帯広駅地下帯広市民ギャラリーで開催しました。昨年は神田日勝がモデルになった朝ドラ「なつぞら」の放映の効果が絶大で、記念美術館の入場者は例年の5倍となり私の家のすぐ近くにある撮影現場や帯広の菓子店に行列ができるほど人が溢れました。お陰で地区展も入場者が増加しました。又、全道展会期中に急逝し、地区展の立ち上げに尽力した岡沼淳一会員の遺作「Spring Stream」も展示、地区会にとって強く記憶に残るものになりました。遺作設置には遠くから伊藤隆弘会員、川名義美会員、北斗市の水口司会員に駆けつけて頂き見事実物を再現しました。開会前日の「偲ぶ会」では田崎謙一事務局長始め知人、仲間、美術関係者等で生前を偲びました。地区展会場は十勝25人の作家による入賞、入選作品と会員、会友による45点を展示。今回新たに会友に推薦された川橋雪弘の「三日月の見方」(彫刻)、初出品初入選を果たした玉池由紀子の「斑鳩」(工芸)が加わり第23回展は全道展らしい独特の個性が光り、個が競い合う会場になりました。今年の地区展は7月30日～8月4日まで帯広市民ギャラリーで開催致します。



陳列に携わった皆で

開館20周年記念くつつあん美術展 倶知安町小川原脩記念美術館

—それぞれの特色を楽しむ展覧会の開催—
2019年11月16日(土)～2020年2月11日(火)

道内には地域に根ざした美術団体がいくつかあり、函館の赤光社や旭川の純生美術会、帯広の平原社等々が活動を続ける。後志管内倶知安町の麓彩会もその1つで1958年、小川原脩を中心に野本醇、穂井田日出磨ら数名によって創立された。会場の小川原脩記念美術館が昨年、開館20周年を迎え第61回麓彩展と地元周辺の作家たちで作るくつつあんARTの合同展覧会が開催された。絵画や書、写真等ジャンルも多くスノーシーズンで訪れた道内外の来館者にも好評であった。(全道展出品者：穂井田日出磨、坂口清一、羽山雅倫、米澤邦子、菊池ひとみ、小島英一) (記 米澤)

全道展道東地区展(釧路展、根室展)

—バトンタッチ、2つの地区展開催を継続—

道東地区展事務局長 宇佐美修一

令和元年8月7日(木)～8月11日(日)釧路市生涯学習センターにおいて5日間の日程で釧路地区展を開催、会員、会友、一般入選者の作品は、小作品を含めて38点が展示された。初日は大荒れの天気の為、午前中は一桁台の入館者でしたが、最終日には多くの市民が訪れ573名の来館者で終わることができました。4日おいて8月17日(土)～8月21日(水)第3回根室展が根室市文化会館多目的ホールで開催され、絵画、彫刻、工芸、小作品を含めて



整然と作品が並ぶ根室市文化会館多目的ホール

総点数40点の展示会場となり、初日の17日には、本日より田崎事務局長による、作品解説、ギャラリートークが開催され一般市民、高校生、出品者に作品の解説をしていただきました。又、夕方より事務局長を囲んで私を含め地元の絵画、陶芸の愛好家と根室の地酒北の勝限定酒、冷酒まつりを酌み交わし新鮮な魚介類に酒の量もはかどったしだいです。根室展での最終日での入館者数643人で終了。さて、日程を分かる範囲でお知らせします。令和2年7月28日(火)釧路展搬入29日(水)～8月2日(日)まで、1日おいて、8月4日(火)根室展搬入5日(水)～9日(日)までの開催予定です。又根室展は第4回目となり根室市文化協会設立60周年記念の冠事業として開催の予定です。ギャラリートークの予定も組み入れる予定です。なお、今回ZENの原稿を書きました宇佐美ですが、令和元年道東地区展の総会で前事務局長、森川会員よりバトンを受け取りました。まだまだ力不足の所がございしますが、個々の力を結集し継続していこうと考えております。よろしくお願いいたします。



作家もジャンルも多彩—特色ある美術展

2019 年 全道展室蘭地区から

—— 自由な発想が魅力的 ——

室蘭地区事務局 矢元 政行

昨年1月10日に会員の野本醇氏が90歳で逝去されました。北海道の美術界で永きに渡って活躍され、室蘭地区の文化、芸術活動をリードしてくれた作家だけに残念でなりません。10月11日(金)～11月4日(月)には、だて歴史文化ミュージアムにおいて回顧展「野本醇展」が開催されました。初期のアンフォルメルから北の風景を描いた絵画、そして晩年の抽象画に至る27点の作品は、何か人の心を引きつけるものがありました。

74回展は本地区から中澤文隆が最高賞の全道美術協会賞を受賞、併せて新会友に推薦され、岳上恵子が奨励賞、中野美砂子が新会友に推薦されました。また、菅原誠が全道展初出品から60年、今回90歳の節目での入選となり地方版の新聞で話題となりました。今年も多くの上賞者が出たことを報告でき大変うれしく思います。



ワンチームの元気な面々

さて、全道展室蘭地区作家展は、8月7日(水)から12日(月)の6日間、室蘭市民美術館オープンスペースで開催されました。出品作家22名で、会期中349人の入場者がありました。最終日には、佐藤光雄会員による進行で、ギャラリートークを実施しました。出品者から制作意図を話してもらい、それを受けて私と山田一夫会員でコメントし質問や意見などフリートーキング形式で行いました。室蘭の作家は、既成概念にとらわれず、自由な発想が作品をユニークにしているのではないかと思います。心から魅力的であると感じています。受賞者の祝賀会と出品者の交流懇親会を室蘭市内の居酒屋において18名の参加で行いました。アットホームな雰囲気の中で、お酒を飲みながら作品の制作意図や作家活動などについて交流し充実した時間を過ごすことができました。

全道展情報発信してます

2019年10月に
リニューアルしました！

ホームページ



全道展

検索

<http://www.zendouten.jp>



エッセー



創作の時、 野生の鳥のように

〔絵画〕島津 明美＝千歳市

強風に吹かれても、雨に打たれても、木々を渡って羽ばたく、^{はね}羽のようにしなやかに思考してゆきたい。

エスキースの時点から、何を見たのか、何が起こって揺さぶりをかけているのか、まぶたの奥底で東ねて、確かめ、画に加筆してゆきたい。

自分は、表現できているのだろうか。明解し、「意味」を、「意志」を、柔軟に受け入れて作品に注ぎ込んでいるのだろうか。

私の現在の表現方法は。

段ボールを、カッターで切る、指で引き裂きさく、水に浸し糊をはがし、乾かして画面構成をしながら貼り付ける、そしてその上に黒インクでドローイングしています。

段ボールは、スーパーで使い終わった空き箱で、食料品など入れて来たものです。

スーパーは、絶えず人と、旬の物が行き来する所。その風景から、箱を頂くのは、^{とき}「時」の一部をはぎ取ってくる思いで家に持ち帰ってきます。

イエローオーカー色の個性的な段ボール。自分の表現したい所作のため、あらかじめ「明・中・暗」と明度を分けておきます。

この素材を使うようになったのは、油彩画を描いている時。個展で使う額の経費軽減の為に、絵に合った額を段ボールで作っていました。そのうち、段ボールの美しさに魅かれて画面に取り込んでいくようになりました。

ドローイングは、ペンの中で最も細い線を描けて、線のメリハリをつけやすい^{まる}丸ペンを主に使い、パイロットインキに^{ひた}浸して描いています。

全道展とのつながり。

札幌で個展を考えていた時に、「全道展に出品してみても？」と言われて十数年ぶりに、初めて段ボールで表現した作品を出すことにしました。

入落選の選考時には、個展より、「大勢の方に二日間もじっくり見て頂ける」と思いました。

今、「個の集団」全道美術協会に在籍するようになり、皆様の切磋琢磨の「^{えん}縁」に触れ、自分自身を内観することの大切さを意識します。

「創作」は、「個」の心の中にあるものを、存在させるまで、意思をもって導き表わすものだから、自分が感じたものをしなやかに受け止め、描いていきたいと思っています。

私の原風景

油彩画から木版画へ転向 紆余曲折のなかで得たもの

〔版画〕重岡 静世＝小樽市

私が生まれたのは昭和19年。戦中戦後の混乱期にあり、両親と5人姉妹の家族にとっては、少しの食糧を分けて食べる苦しい生活でした。土地を開拓して野菜を作ったり、母も内職してやりくりするような状況だったのですが、女一人でも生きていけるようにと大学まで進学させてくれました。

母から絵の手ほどきを受けた2番目の姉は「毎日絵を描くように」と言って、私に絵を教えてくださいました。それが10歳位まで続きました。5人姉妹の末っ子の私は、年の離れた姉たちに囲まれて、自分のことを話す順番がなかなか来ませんでした。今思えば、自分の内面を表現する方法が絵になったのもそのためだったのかもしれない。

私が15歳のとき、4番目の姉が事故でなくなり、姉が使っていた油絵具を引き継ぎました。初めは写生が主でしたが、麻生三郎の絵が好きで、ずっと模倣していました。大学の卒業制作を描く頃、ベトナム戦争がおり、不条理な戦死に対する思いを絵にしました。指導教授から「模倣してもその人以上にはなれない」、「空間を描くために物を描くのだ」との助言をいただき、今も心に刻まれています。

母子像を多く描いていたので、子供をもっと知りたいたと、結婚し、教員をしながら長女を出産しました。保育所も店もない道東の漁村で長女を育てました。家事、仕事、制作に育児が加わり、筆こそは折りませんでしたが、展覧会では落選することが多い時期でした。

同じ学校で教員をしていた夫が、退職し彫刻家になると言い出しました。私も退職し、夫の実家のある小樽市銭函へ転居しました。我が子にひどい貧乏をさせたくないと思い、障がい児・者施設で働き、36歳で離婚もし、



長女と長男の二人を育てながらの制作でした。心身ともに疲れ、デッサンを十分にせず描き出し、濁った色彩の絵を描いていた頃もありました。

姉たちに「版画の方が合っているのでは」と言われたこと、全道展の版画作品に惹かれていたことから、58歳で版画に転向しました。64歳で退職後は、制作の時間が確保でき、作品のモチーフや技法を追求できるようになりました。初出品から50年近く経った、70歳で全道展の会員になりました。

色をつけた和紙に摺る陰刻という技法を教わったことで、一版で多色摺りの表現が可能になりました。それにより、テーマをより強く表現できるようになりました。不器用な作品の中に、社会や政治に対する考えを作品に込めることが多いのですが、見る人の癒しになるような作品を制作していきたいという課題もあります。残念ながら、今の政治では私の作品もなかなか明るくならないのが現状です。

作品には父の影響も大きいのです。園芸を研究し、日頃から木の大切さを語り、高齢になっても植林に参加していた父。父への賛歌として「大樹」をはじめとする木をモチーフにした版画を制作し、昨年平和展のポスターに採用されました。

また、昨年末、小樽美術館の市民ギャラリーにて「母の祈り・重岡静世展」と題して、小樽の美術史に残る優れた木版画の収蔵作品とともに作品展が開催されました。より多くの方にご高覧いただく機会に恵まれたこと、感謝しております。



強いメッセージ性の作品と北海道新聞で紹介される (2019.11.19)



来館者を待つばかりの会場

ART STAGE

—寡 黙 な 表 現—

テクノロジーの支配する現代、人々は人間として大切な「感性」をしだいに失ってきました。そのために感性をよりどころとする芸術家は、一般の人々に背をむけ自分の世界に閉じこもってしまいました。「絵はわからない」「わかってもらわなくてもいい」……現代は芸術家と一般大衆との間に、はっきりした背反が生じてしまっているのです。

今回、当館ではそういう現代の中にあっても、芸術家として寡黙な表現で表出された感性を伝えようとする姿勢を示す作家たちによる展覧会を企画しました。

深川市アートホール東洲館館長 渡辺 貞之

■高橋三加子展（10月17日～31日）

全道展の会員としては若くから注目され、その表現は一貫して「人間の情景」をテーマにしています。それは単なる人間の形象ではなく、現代に息づく人間模様、なにか淋しげな、なにか孤立感のある群像……。決して眼をあわすことなく、言葉も交わさない人間たち。感情をおさえた色彩が、寡黙な姿勢をとりながら鋭く告発する作家の感情を美しくオブラートしています。



高橋三加子

■石本久美子展（11月2日～15日）

ただひたすらに純白な空間……そこに漆黒の人間の肢体。その人間たちからは言い知れない苦悩を感じるのです。作家は「写真のように描きたい」「どうしてか、生命感のある動的な人間というより、屍にさへ感じる人間の状況に惹かれる」といいます。鋭いモノクロム、息を飲む繊細な表現の中に作者の激しい人間観察の眼が光っているのです。



石本久美子

■佐藤麗子・坂みち代銅版画ふたり展（11月2日～15日）

混沌とした森の中、樹や葉や草……。そうした樹木の細密な表現。しかし、ただひたすらに描き込む深林の世界の中に蠢くであろう無数の生物の気配は感じない。なぜなのか？ しかも風の音、空気さえも感じない。微動だもしない深林の表現を凝視する佐藤麗子の脳裡にある感性は……。



佐藤麗子

幼い子どもの情景。描かれている子どもはいずれも無言。子どもの背景は日常の何処にでもある横断歩道だったり、公園だったり。そういう日常の世界が一瞬のストップモーションになった時の緊張感。沸き上がってきそうになる恐怖感を、幼い子どもの仕草によって、かろうじて魅入らせてくれる坂みち代。



坂みち代

■谷口一芳回顧展（2020年1月17日～31日）

2013年に長逝された元会員。森を愛し、その森に生息する小動物を愛しむ作家。特に森の守護神といわれる梟の擬人化された表現は、現代失われていく「情感」を思い起こしてくれるのです。



谷口一芳

今年度開催予定（期日は未定です）

●高橋靖子展 ●伊藤隆弘彫刻展 ●竹岡羊子展 ●權展 ●岸本裕躬回顧展

アートホール東洲館

ART HALL TOSHU-KAN

深川市経済センター2階

Eメールアドレス bz649093@bz01.plala.or.jp

第9回 新鋭展 開催

—— 充実の鑑賞空間 ——

2019年11月12日(火)～11月17日(日)

全道展協会賞や道新賞等の各受賞者に会友選拔者5名を含む18名による展覧会が開かれた。

会場の大通美術館には30点余りの作品が配置よく並び、オープン初日は田崎事務局長から「切磋琢磨の場にしてほしい」と挨拶があった。また同日閉館後に別会場で催された懇親会には出品者、来場の会員など40名近くが出席し、和やかな雰囲気の中交流を深めた。

開催期間中の来館者は800名を超えたものの、企画部では今後、会員、会友により多く観覧を、と呼びかけている。



自作への思いを語る出品者

和気あいあい、会話が弾んだ懇親会



全道展から2名が受賞されました —— おめでとうございます ——

●高橋靖子会員〔絵画〕

2019年度 第8回「北の聲アート賞」

革新的な文化創造や創作活動に取り組む個人や団体に贈られる。最高賞の「きのとや賞」を受賞。

●八子直子会員〔絵画〕

第29回道銀芸術文化奨励賞

優れた芸術文化活動を行い、将来が期待される個人団体に道銀文化財団が贈る。国内外のグループ展、個展での積極的な活動が評価されての受賞。

北海道版画協会 60周年記念展

—— 魅力いっぱいの版づくり ——

2019年11月5日(火)～11月10日(日)

全道の版画作家36名による「北海道版画協会60周年記念展——PRINTRICK——」が11月5日から11月10日まで大丸藤井セントラルスカイホールで開催された。全道展関係は13名が出品し、木版、銅版、スクリーンプリント等、多種多彩な作品75点が展示され、会場には興味深げに作品に見入る人々の姿があった。

また協会では60周年記念誌の刊行や会員による版画集も販売した。記念レセプションのワークショップでは、親子で版画作りを体験してもらい参加者はちょっぴりアートに触れた1日を楽しんだ。

なお本展は、引き続き12月3日から深川市アートホール東洲館で記念移動展が開催された。

(記・澁谷美求)



1日1000人以上が訪れた会場

親子で楽しむワークショップ風景



編集後記

自分の心を表現したくて制作に向かう。孤独だけれどぜいたくな時間だ。ある直木賞作家の受賞の弁。「小説を書くのは9割9分9厘しんどいが、思ってもいないことが出てくる。その瞬間がすごく楽しい」と。創造・制作に携わる人に共通する思いかもしれない。

〈(文責) 米澤・川本(ヤ)・澁谷〉